

養育性の育成に関する研究 －幼児期から始める「共感教育」－

櫃田 紋子¹⁾

A Study of Cultivating Nurturance

－An Educational Program (Roots of Empathy) Started from Early Childhood－

Ayako Hitsuda¹⁾

要約：

本稿でとりあげる「共感教育」(Roots of Empathy=ROE)は Mary Gordon により創設された幼稚園児から中学生を対象としたカナダの教育プログラムの一つで、学校教育のなかで実践され次世代の養育性を養う準備教育として成果をあげている。生徒は1学年を通して一人の乳児の成長過程と親子関係に直接ふれながら共感性を育んでいく。筆者らは ROE の日本での有効性を検討するため、東京都下H市立小学校において総合学習の一環として試行的実践を行なった(2001年6月～2002年3月、2003年3月)。生徒の87%は高い授業評価で、命への慈しみ、乳児の感情や発達について理解を深め、とくに自尊感情の上昇が認められた。ROE は予防的プログラムとしてさまざまな教育効果が期待できるが、導入には十分な検討が必要である。日本での取り組みの可能性、活用について考察する。

キーワード：共感性、養育性の準備教育、命への慈しみ、自尊感情

1. はじめに

親による幼児虐待、不登校やいじめ、青少年による暴力的な犯罪など、家庭も学校も大きく揺れる中で社会全体の養育性を高めることで問題化を防ぐ予防的観点をもった対策が模索されている。人間の養育性(nurturance)は、その萌芽は幼少期に認められ、自らが育つ過程での体験や学習の積み重ねにより社会的能力として発達するものと考えられる。しかし少子化の進行に伴い家庭にも地域にも体験を通した学習の場が減少し、乳幼児との接触経験をもたないまま親になる若ものが増加している。自然に習得することが困難になってきている状況であれば、早い時期から学校という教育の場で意識的に体験していくことが必要ではな

いかと思われる。カナダでは、こうした考え方を親になるための学習プログラムとして具体化して、学校教育のなかで積極的に取り組んで成果をあげている。筆者らはカナダとの共同研究で子育て家庭支援に関する調査を行なう途上で、1997年トロント市の公立小学校で実践されている「共感の根」(Roots of Empathy=ROE)と呼ばれるプログラムの存在を知った。ROE は幼児期より養育性を育むための教育を行い社会全体の力を高めようとする長期的展望をもったプログラムで、子どもを巡るさまざまな問題状況が深刻化しつつある日本においても適用可能ではないかと考えた。98年にこのプログラムの創始者である Mary Gordon (M・ゴードン) とトロント市教育委員会の招きで、研究メンバーらが ROE のインストラクター研修を受

1) 浦和大学総合福祉学部

Faculty of Comprehensive Welfare, Urawa University

け実践者資格を得たが、残念ながら総合的学習が施行されるまでは実践可能な状況にはなかった。2001年に M・ゴードンの招聘が実現し、実践指導や講演、交流会などを通して日本の子育て家庭支援のあり方を考える上でも少なからぬ影響を与えたと思われる。ROE の概要を紹介し、日本での試行的実践からの学び、このプログラムのもつ意義をあらためて考えてみたい。

2. 次世代の養育性を育むためのプログラム

このプログラムの創始者、M・ゴードンはトロント市インナーシティの公立小学校の中に地域に住む親子のためのペアレンティングセンターを設立した人である。インナーシティは多文化社会が抱える社会問題が凝集されているといわれる下町で、犯罪、麻薬、未婚の母、ストリートチルドレンなどが多く、また学校でのおちこぼれの出現率も非常に高い地域である。こうした問題を放置すれば社会的弱者を再生産することになる。そこで問題を次世代へ持ち越さないために就学前の子どもと親を支えるさまざまな実践がなされた。これらの活動を通してゴードンは、子どもの学習意欲にもっとも関係深いのは親自身であり、親と子の愛と信頼であると確信する。そして人生のよいスタートをきることができなかつた、十分に経験することができなかつた子どもたちが、将来よりよく養育力を発揮できる大人になるために、教育の場で行うペアレンティングプログラムを考案したのである。

このプログラムは「共感の根」と呼称されるように、乳児のもつ豊かな感性を借りて、子どもたちの共感性を育むための学習プログラムである(筆者らは「共感教育」と名づけている)。1996年より、トロント市の公立小学校で、5歳の幼稚部から始まり日本の中学2年にあたる第8学年までを対象に授業の一環として実施されている。生徒たちは乳児をもつ親の協力をえて、教室で毎月1回、約10ヶ月間、同じ一人の乳児の成長と親子の情愛的な絆の形成過程に直接触れながら学び、人間発達への理解、他者への共感性や思いやり、自尊感情、命への慈しみ、ひいては将来、健康な親(大人)となるための養育性を育てていくのである。Dr.

Kimberly Schonert-Reich (UBC) らは ROE プログラムを受けた生徒は受けなかつた生徒と比較して、共感性レベルが上昇し攻撃行動が減少すると報告している。(以下「赤ちゃん」という言葉をあえて用いることとする。このプログラムの要めは乳児で、「赤ちゃん」にはやさしいひびきがあり、人々を惹きつけ自然に心を開かせてしまう乳児のもつマグネティックな力に相応しい表現と思われる。)

2.1 赤ちゃんとその親を教室に招く

授業の構成員は、1クラス(20~20数名まで)につき、地域に住む一組の親と赤ちゃん、このプログラムの実践資格のあるインストラクター、クラス担任と生徒たちである。赤ちゃんは、この授業がスタートする新学期の時点で生後2ヶ月~4ヶ月児が選ばれる。それは赤ちゃんのクラス訪問の期間が人間の一生の中でもっとも急速な発達を遂げる時期にあたることによって、生徒たちがその発達の変化を感動的に学ぶことができるからである。実際、学年末には「わたしたちの赤ちゃん」という親しみをこめて呼び1歳の誕生日を祝うようになっている。対象の親子はペアレンティングセンターの利用者の中から該当月齢のカップルが選ばれることが多い。

障がいをもつ赤ちゃんを積極的に選んで病院と連携しながら授業をすすめていくこともある。生徒たちは親と共に、赤ちゃんの成長を喜び、障がいを自然に受け入れ見守るなかで、人権の意識を育てていく。また父親の協力が生徒たちに健康な父親モデルを示すために重視されている。参加する親の約3割は父親である。

2.2 年間27回の授業

プログラムは、3つの要素から構成される。第1はインストラクターによるプログラム開始前の家庭訪問である。親子が安心できるように授業の内容について十分に話あい、信頼関係を築くようにする。また初回の事前授業で生徒に見せるための写真を準備する。第2は親子によるクラス訪問で、毎月1回9ヶ月間継続される。第3がインストラクターのみによる事前・事後のクラス訪問で、毎月2回9ヶ月間実施される。生徒は総数27回の授業を受ける。

2.3 カリキュラムの中心は赤ちゃん

カリキュラムの構成は、全学年に共通で、赤ち

やんの月齢による発達、行動、世話などについて学習できるように以下の9テーマが設定されている。

- 1) Meeting the Baby、2) Crying、3) Caring and Planning for the Baby、4) Emotion、5) Sleep、6) Safety、7) Communication、8) Who am I?、9) Goodbye and Good wishes

このカリキュラムに併せて、学齢により幼稚園・プライマリー（小学1年～3年）・ジュニア（小学4年～6年）・シニア（中学1年～2年）という4レベルの内容が提供される。このプログラムは通常の授業の中に位置づけられており、授業計画の最初の段階からクラス担任との共同作業で進められ、他の教科のカリキュラムとの関連性を考慮したものが作成される。1回の時間は、幼稚園25～30分、その他の学年は30～40分である。

2.4 インストラクターの役割

インストラクターは、親子と生徒たちを繋ぐ橋渡し役である。親子の状況を的確に把握し臨機応変に対応しながら、生徒が赤ちゃんの行動や発達を深く理解できるように、からだの発達だけでなく、感情や親子の相互作用に着目して生徒の気づきを促す。事前・事後の授業では、親子訪問のある授業のなかで生徒たち全員が体験したことの意味を学びあい、また自分たちの体験に置き換えて赤ちゃんの感情をより深く、まさに共感的に理解させる。

10ヶ月以上に亘って赤ちゃんや親子の関係に直接触れる体験はそれ自体でかなりの学習成果が期待できる。しかしそこにインストラクターが介入することによって、単に赤ちゃん理解にとどまらず、生徒自身の心の成長を促進するのである。このようにインストラクターの果たす役割は非常に大きく、またプログラムの理念、成果の質を維持するために相応の力量が求められる。カナダでは通常、小学校や幼児教育の経験があり学級管理能力に長けた人が組織化されたトレーニングを受け、実践資格を取得してインストラクターとして授業を行なっている。

2.5 思春期の子どもたちにとっての意義

第2次性徴の出現によって始まる思春期は、急激な身体的、性的な成熟とそれに伴う自分自身の変化を受容しつつ新たに自己を築いていくという困

難な課題を抱えた時期である。自己イメージを低下させたり、自分自身の拠って立つ基盤が揺らいでしまう子どもも多い。こうした時期に親にとってかけがえのない存在として大切に育てられていく赤ちゃんとの出会いは、それによって自分の幼少期の再体験をし、自分自身を肯定的に受容することを容易にするであろう。また性教育や妊娠、出産、育児などについての望ましい考え方を伝えるのにも役立つという直接的なメリットもある。

3. 日本での試行的実践から

ROE プログラムは、あまりにも体系的組織的であることや、特に年間、総授業数27回がネックとなり教育現場への導入は容易ではなかった。2002年度から総合的学習が施行されることになり漸く、公立学校での実践の可能性がでてきたのである。先ず試行的実践の結果について概括し、日本における今後の活用に向けて考察する。

3.1 公立小学校での実践について

先ず学校長、教育委員会の許可を得て実践の運びとなる。教育委員会からは、学習指導要領に基づくこと、総合的学習のねらいに沿うこと、生徒の保護者に周知すること等々に関して指導を受けた。実践にあたって始めに授業の構成メンバーの一人であるクラス担任の理解を得ることが重要である。

協力者である赤ちゃんへの安全や緊急時の対応として、赤ちゃんの学校訪問時には助産婦・保健師の同席（ボランティア）を設定した。カナダでは幼稚園、プライマリー、シニアの各クラスでの実践を見学したが、こうした設定はなされず親の方もそのことに不安を感じているようすは見られなかった。しかし日本で実践する場合、学校の危機管理もさることながら赤ちゃんの安全面、親の安心感を考えると十分な配慮が必要であり、保健師等の同席は有効であったとおもわれる。

協力親子は、赤ちゃんの体力などの点からできるだけ近隣に居住していることが望ましく、学校設置市近辺での協力者を探し依頼した。

3.2 学校教育の中での位置づけ

総合的学習の一環として実践することになったが、時間的制約から全工程を実践することは難しいため、M・ゴードンの特別の許可をえてブリー

フセッションを設定した。すなわち 1) Meeting the Baby (生後3ヶ月)、2) Crying (生後5ヶ月)、3) Emotion (生後7ヶ月)、4) Who am I? (生後10ヶ月)、5) Goodbye and Good wishes (生後12ヶ月時は1回)の5テーマにしぼり、最終回に1歳の誕生会をみんなで祝うという、通算13回の授業を行なうこととした。

実践校では対象児童が低学年のときに、保健の授業で赤ちゃん人形などを用いて自分の誕生や命についての学習を行なっている。そのような学習をベースにこのプログラムは、総合的学習『命の大切さと自分の成長を知る』単元の中に位置づけられた。

3.3 小学5年生のクラスで実践

東京都下のH市立小学校5年生2クラスの児童55名を対象とした。高層の団地が立ち並ぶ地域にある小学校で、団地に住む世帯と代々地域に住む世帯の子どもたちである。共働き家庭の鍵っ子もあり、家庭環境はさまざまである。赤ちゃんは2組とも女兒、第一子と第二子で、いずれも母親の育休中の参加である。父親の参加は第一子の方に3回あった。

実践期間は、2001年6月より2002年3月までである。2003年3月、プログラムの終了1年後(6年生の卒業時)、2歳の赤ちゃんとの再会授業を行なった。

3.4 アセスメントの方法

実践による学習効果を客観的に把握するために1) ビデオによる授業記録、2) 共感性尺度(生徒による赤ちゃん・自分・親に関する自己評価)、3) 行動尺度(担任による生徒の行動評価。カナダ版をベースに担任との協議で作成)、4) 学習時アンケート(担任との協働で作成)、5) 生徒および担任による ROE 実践評価(カナダ版)、6) 保護者による ROE 実践評価、7) 赤ちゃんの親のヒヤリング記録等、多面的な測定方法をとった。授業の一環としてこれらの作業によって自他への気づきを促進させる、学びをより深化させる等に留意して作成、実施したものである。

3.5 ROE 実践による児童の変化

(1) 実践後のクラス状況

5年生は思春期前期の難しい年頃である。対象クラスも自己主張の衝突から友だち間のトラブルが多く、暴力をふるう、罵り合うなど攻撃性のコン

トロールが難しい少数の子どもに振りまわされている状況が観察された(それが実践理由の一つになっていた)が、これらの行動が5回目頃から減少し始める。担任はクラスの雰囲気に着きや優しさを感じるようになったと評価している。実際、音楽の教師から“しっとりと歌えるようになった”と高く評価され、他の教科での学習態度も改善されるなど波及効果は大きい。

(2) 生徒の行動の変化

担任による「行動評価」をみると生徒たちの行動は、1) 自信がつく、2) 攻撃性が低下、3) 仲間意識が高まる、4) 共感性が高まる等の傾向が認められる。且つ、これらの傾向は開始時より終了時、さらに開始から2年後とつよまっており、小学校高学年で培った共感的能力が学習時だけでなくその後も持続されていることが推察される。因みに、担任は通常と異なる授業場面での生徒観察を通して、多面的な認知が可能になっている。

(3) 「自分」「親」への意識

生徒自身による「自己評価」の変化をみると、赤ちゃんが好きだ、もっと知りたい、抱いてみたい…など、「赤ちゃん」に関しては、元々肯定的評価が高いため大きな変化はみられない。一方、自分が好きだ、頼られていると思う、自分をやさしいと思う…など、「自分」に関しては、授業回数を重ねる毎に高くなり、自己肯定感がつよくなっていくことが窺える。「親」への関心も総じて肯定的評価が高くなる。「赤ちゃん」や「自分」に対して変化の少ない子どもでも「親」に対する認知の変化がみられる。自己肯定感をもつことで、親は自分の言い分をよくきいてくれる…など親とのコミュニケーションが変化してきている。

「自分にとって大切なものはなにか」という設問に対して上位にあがったものは、家族(ないと生きていけない)(64.3%)、友だち(53.6%)、お金(78.6%)、命・自分(生きているあかし)(82.1%)、気持ち・たましい(人や自分の気持ち)(50.0%)、食料・水・飲み物(100%)、衣服(36.7%)、からだ(71.4%)などである(複数回答)。自分をつくっているもの、家族や命の大切さ、いま自分自身が在ることの意味に心を向けていることがわかる。

保護者アンケートによると、全ての家庭でこの授業について子どもと話し合いがあり(82.6%)は

毎回)、自分の小さい頃のことや教室にくる赤ちゃんの成長ぶりが話題になっている。親は“子どもの気持ちが悪くなった”“対話が増えた”などを高く評価している。家庭での親子の話し合いも「自分」「親」を再認識する機会となっているのであろう。

(4) 関係性のなかでの赤ちゃん理解

授業アンケートの観察記述をみると、生徒たちが赤ちゃんの発達や親子の関係性の発達をよく観察し理解を深めていく過程がわかる。例えば実践前には小さい、かわいい…と単純な形容詞でしか表せなかった赤ちゃんについて、1回目の授業後には“脳がこわれるからゆさぶらない”“ミルクじゃ赤ちゃんは育たない”などの感想がでる。首も座らない3ヶ月の赤ちゃんにはじめて出会った授業後の記述では、からだの細部や動きを好奇心いっぱいに表示し、また抱っこされると泣きやむ(89.3%)とほとんどの生徒が親子の関係に反応している。そして“泣き方が前とちがう”“いやなことを体であらわす”(5ヶ月)、“自分の方をみてくれた”“おもちゃを受けとってくれた”“親子で心が通じあっているなどおもった”(7ヶ月)、“赤ちゃんが泣いている時、お母さんがやさしそうだった”(10ヶ月)…など、感情やコミュニケーション、親子関係の記述が増えてくる。

親子の情愛的関係が形成される過程に直接触れ、生徒自身もまた赤ちゃんや親との関係性を築きながら人間理解を深めている。インストラクターのファシリテーション技能や同じ親子を継続して観察できることが親子関係の発達への気づきを容易にしていると思われる。

(5) 協力赤ちゃんとお母さんとの意味

2組とも母親の育休中の参加であった。“（初めだけ少し不安であったが）よかった、貴重な体験だった”“（生徒の）質問に応えると（親としての）自信がつく”“わが子がみんなに見守られている”“（将来の）子どものすがたを想像することができた”“終わるのが残念だった”とポジティブに捉えている。近隣に住む親子であるので、折角の関係を地域のなかで育てていく仕組みをつくるのがつぎの課題でもある。

4. 日本での実践における課題

ROE は、ゴードン氏の優れた発想のもとで体系的、組織的に作られたプログラムである。日本の学校教育の中で実践していくためには、ROE の授業を支える環境が必要である。2002年4月から新学習指導要領のもとで小学校3年生以上に、教科横断的な内容を学ぶ総合的学習の時間が始まり、授業内容を各学校裁量で決められるようになったことで、ROE を公立学校で実践することの可能性が広がってきた。体験を重視した主体的な学びの促進や自ら考える力を育てることを目指した新しい学力観はまさに ROE の理念や教授法とも通じるものである。学習指導要領に基き、正規の授業として、他教科との関連性のある授業を実践していくために、インストラクターは学級担任と常に綿密な共同作業を進めることが大切である。しかし、実際的な問題として年間27回の授業を実践することは容易ではない。またインストラクターの養成も課題の一つであろう。カナダのように小学校や幼児教育の経験者に止まらずむしろ、保健師、養護教員、臨床発達心理士、臨床心理士その他、幅広いリソースの活用が望ましい。試行的な実践を通してさまざまな効果が認められた。社会全体の養育力を高めるために学校・家庭・地域の連繋を強化する ROE の如きプログラムが、全国何処にも在る学校という公的な場で実践・展開されることを期待したい。しかし日本の文化・教育に適合したかたちで根付くためにはさらに十分な検討が必要であり、本格的な実践は文部科学省レベルの取り組みが必要であろう。

5. 地域福祉型プログラムへの活用に向けて

生徒と赤ちゃんとの交流を目的とする「触れあい体験」という学習活動は、日本においても従来数多く実施されてきた。乳幼児健診や育児相談、赤ちゃん学級、子育てひろば、保育所、児童館…等々での中・高校生との触れあい、保健師、保育士らによる学校での出前授業、最近では家庭科教育での体験授業…等々、地域の社会資源を利用したさまざまな交流活動が行われてきた。しかし、これらの活動はカナダのプログラムの如く体系的組織的ではない。特定の一人の赤ちゃんの成長過程

や親子の関係性を視野にいれて年間を通して継続するという発想はなかった。2002年度、少子化対策の一つとして厚生労働省による「年長児童と赤ちゃんのふれあい事業」もはじまり、次世代の親育てという視点が明確に打ち出されてきた。地域の子育て支援の場で赤ちゃんプログラムを導入する試みも見られ、さらに拡大することが予想される。次世代の養育性を養うために、カナダの ROE プログラムに学ぶところが多いが、認可制であるから汎用することは許されない。ここでは学校でなく、地域の福祉施設等で「赤ちゃんとの交流事業」に取り組む際のプログラム作成上のポイントをあげる。

1) なぜ乳児とその親であるのか

乳児であること（3ヶ月頃から）、親子であること、継続参加ができること、近隣に住んでいること等が協力対象として望ましい。参加児童は一つの幼い命の成長発達するすがたに感動的にかかわれることや、親と子が相互作用を通して情愛的な絆を形成していく過程にじかに触れながら、人間関係の原点である自分自身の親子関係を再体験する等、深い内面的な経験をするのである。そして「体験」の場だけでなく地域の中での交流に広げることができる。

2) 養育性の基盤となる力を育む

自尊感情・自己肯定感、共感性・思いやり、命の大切さ・慈しみ、将来の親像（自己像）、基本的な発達知識・技術等が養育性の基盤として機能し

ている。養育性は他者に関わり育てる資質とすると、その中核となるのはまず自己尊厳や自己肯定感であり、他者の視点に立つことができる共感性である。

3) 実践者が留意すること

赤ちゃんの安全・衛生面の配慮、協力家庭との信頼関係、感情に焦点をあてた働きかけ、「気づき」を促進させる働きかけ、参加生徒の主体性の尊重、大人モデルとしての自覚をもつ等が実践者に求められる。プログラムを効果的に進めるには参加者全体のグループファシリテーター的な役割を担うことができる実践者の存在が重要である。

6. おわりに

養育性（nurturance）は、前述の如くその基盤になるのは基本的な人間の力であり、親になるためというより、大人としての社会的な資質として誰にも求められるものであろう。かつて家庭や地域にあった養育性を培う土壌が失われつつある現在、何らかの仕組みを再構築していくことが急務である。ROE はそのためのアプローチの一つと考えているが、残念ながら日本での実践は未だ試行段階にある。一方で赤ちゃんを中心にしてさまざまな地域福祉型の交流プログラムが広がってきている。これら教育的あるいは地域福祉のプログラムは家庭・学校・地域を繋ぎ社会全体の養育力を高めることに寄与するものとおもわれる。今後さらに実証的な研究を継続していく。

参考文献

1. カナダの子育て家庭支援研究会, 「人権尊重と相互扶助の市民意識に根ざしたカナダの子育て家庭システムの研究」, トヨタ財団助成研究報告書1997-1998年度, 子ども家庭リソースセンター
2. 金田利子編著, 『育てられている時代に育てることを学ぶ』, 新読書社, 2003年
3. 小出まみ, 『地域から生まれる支えあいの子育て』, ひとなる書房, 1999年
4. 小林順子他編著, 『21世紀にはばたくカナダの教育』, 東信堂, 2003年
5. 永田陽子・櫃田紋子・福川須美・伊志嶺美津子・田島昌子, カナダの「共感教育」の実践とその有効性, 安田生命社会事業団研究助成論文集 Vol37, p209-215, 2001年
6. Gordon, Mary. "The Roots of Empathy." *Community Stories*. Ottawa, ON: Caledon Institute of Social Policy, June 1999, journal article
7. Gordon, Mary. "Family Literacy Centres Involve Parents Early." *Literacy Works* Vol.3, No.3, Spring 1992: pp1-3, journal article
8. Gordon, Mary. "Home is Where the Start is." *Education Canada* Vol.39, No.4, Winter 2000: pp44-47, journal article

9. Gordon, Mary. "Readiness to Learn." *Linking Research to Practice* Spring 2000: p24, journal article
10. Gordon, Mary. "Parenting and Family Literacy Centres of the Toronto District School Board." *Family Literacy in Canada: Profile of Effective Practices*, Edited by Adele Thomas, 1998, chapter
11. Gordon, Mary. "Roots of Empathy Program." *IM Print*, Vol.27, Spring 2000, journal article
12. Gordon, Mary. "Program Stimulates 'Roots of Empathy' in the Classroom." *Canada's Children Child Welfare League of Canada*, Fall 1999, journal article

Abstract

Roots of Empathy (ROE) created by Ms Mary Gordon, has been a part of school curricula in Canada and has contributed to cultivating nurturance among children. Through ROE, a year round cooperative program between a baby, its parent(s) and students ranging from kindergarten through junior high school, children learn empathy. This study was aimed at examining the effects of ROE in Japan, which was implemented at public Elementary School in H city Tokyo (from June 2001 to March 2002, March 2003). Questionnaires and remarks made after class resulted 87% positive feedbacks. Self esteem of children increased after they learned respect for lives by focusing of a baby and observing its development. ROE can be defined as an effective study program to prevent various problems in the future. However, to start it in Japan, it needed to be examined carefully.

Key Words: empathy, nurturance, respect for lives, self-esteem